

沖代地区条里跡 久毛地区・苅又地区・牛踏地区
中津城本丸南西石垣(V)

2005年度 中津地区遺跡群発掘調査概報18

中津市文化財調査報告 第41集

2006

中津市教育委員会

例　　言

一、本書は中津市教育委員会が2005年度に実施した中津地区遺跡群発掘調査事業の調査概報である。
一、調査は2005年度国宝重要文化財等保存整備事業費および2005年度大分県文化財保存事業費の補助を受けて実施した。

一、調査主体　中津市教育委員会

調査責任者　影木　莊一郎（中津市教育委員会教育長）

調査委員　後藤　宗俊（別府大学教授）

豊田　寛三（大分大学教授）

調査指導　高瀬　哲郎（名護屋城博物館）

小泊　立矢（別府大学講師）

後藤　一重（大分県教育庁文化課）

調査事務　國分　重喜（中津市教育委員会文化振興課課長）

保科　眞（　同　　文化財係長）

富田　修司（　同　　文化財係）

平田　由美（　同　　）

調査担当　高崎　章子（　同　　）

花崎　徹（　同　　）

浦井　直幸（　同　　）

上記の他、北垣聰一郎氏（元東大阪短期大学教授）、渋谷忠章氏（大分県埋蔵文化財センター所長）、渡辺文雄氏（大分県立歴史博物館）、梅崎恵司氏、佐藤浩司氏（北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室芸員）他多数の方々よりご指導いただいた。厚く御礼申し上げます。

一、沖代地区条里跡久毛地区的調査は花崎徹が、荅又地区・牛踏地区的調査は浦井直幸が、中津城の調査は高崎章子と浦井直幸が行った。

一、本書の執筆、編集、写真撮影は第1章、第2章2、3を浦井が、第2章1を花崎が、第3章を高崎が担当した。

一、実測、製図、拓本等は上記担当者の他、塩谷絹子、松村たか子、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、猪立山順子、金丸孝子が行った。

一、現場作業及び遺物整理は下記の皆さんによる協力による。

山縣信夫、石塔美代子、中村香代子、田中トミ子、瀬口礼子、阿部恵子、川口政代、江藤清子、中島祐子、田原文子、塩谷絹子、松村たか子、穴井美保子、岩本敏美、佐藤智子、橋内順子、猪立山順子、堀川雅史、今永キク子、植山ヨシカ、植山京子、徳永賀子、松本熟、辛島雅美、黒川ミユキ、黒川洋美、新田秀勝、若木和美、松本貞子、宮久君子、掛布玲子、片桐千鶴、福永美佐子、長岡早苗、懶仙花、西木幸子、岡田由美恵

目 次

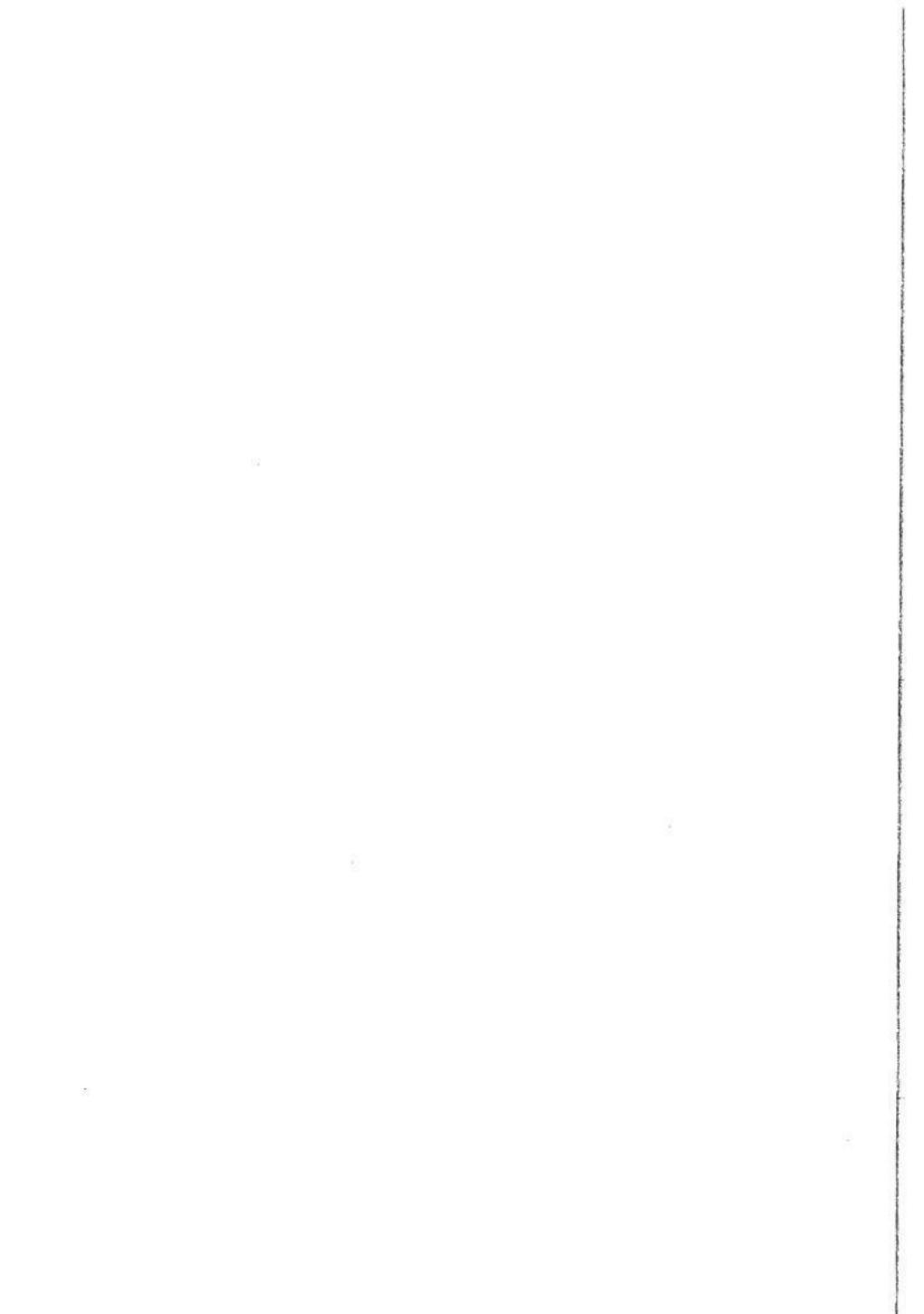
第1章 地理と歴史的環境	1
第2章 沖代地区条里跡	3
1. これまでの調査	3
2. 久毛地区	4
3. 莉又地区	7
4. 牛踏地区	9
第3章 中津城本丸南西石垣（V）	10
1. 中津城の歴史と遺構	10
2. これまでの調査と工事の概要	10
3. 17年度調査の概要	12
写真図版	25

第1章 地理と歴史的環境

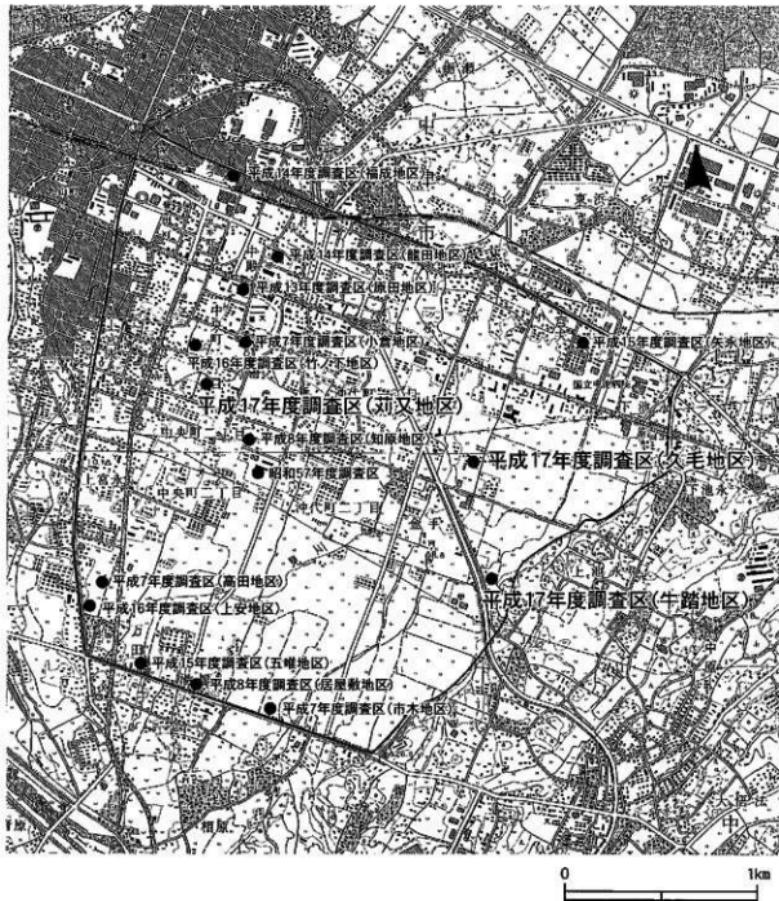


- | | | | | |
|-------------|--------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 中津城 | 13. 上ノ原平原遺跡 | 25. 福島遺跡 | 37. 草場窯跡 | 49. 諸田遺跡 |
| 2. 中津城下町遺跡 | 14. 大池南遺跡 | 26. 福島地下式横穴 | 38. 踊ヶ追窯跡群 | 50. 定留貝塚 |
| 3. 豊田小学校遺跡 | 15. 上ノ原稻荷塚遺跡 | 27. 前田遺跡 | 39. ホヤ池窯跡 | 51. 定留遺跡 |
| 4. 沖代地区条里跡 | 16. 清次郎原遺跡 | 28. 森山遺跡 | 40. 大谷窯跡 | 52. 天貝川遺跡 |
| 5. 相原廟寺 | 17. 横遺跡 | 29. 岩井崎横六墓群 | 41. 野依遺跡 | 53. 和間貝塚 |
| 6. 三口遺跡 | 18. 黒水遺跡 | 30. 洞ノ上横穴墓群 | 42. 野依地区条里跡 | 54. 田尻大迫遺跡 |
| 7. 相原山首遺跡 | 19. 大坪遺跡 | 31. 洞ノ上窯跡 | 43. 中須遺跡 | 55. 是則遺跡 |
| 8. 鶴市神社裏山古墳 | 20. 長者屋敷遺跡 | 32. 安平遺跡 | 44. 若旗遺跡 | 56. 全徳遺跡 |
| 9. 坂手隈横穴墓群 | 21. ポウガキ遺跡 | 33. 城山横穴群 | 45. 十前堀遺跡 | 57. ガラヌノ遺跡 |
| 10. 弓旗郡古墳 | 22. 大悟法地区条里跡 | 34. 城山古墳群 | 46. 野田遺跡 | 58. 龜山古墳 |
| 11. 上ノ原横穴墓群 | 23. 原遺跡 | 35. 才木遺跡 | 47. 上畠成遺跡 | 59. 石堂池遺跡 |
| 12. 効勤野地遺跡 | 24. 田丸遺跡 | 36. 城山窯跡群 | 48. 諸田南遺跡 | 60. 舞手川流域遺跡 |

第1図 中津市内主要遺跡分布図 (S=1/50,000)



第2章 沖代地区条里跡



第2図 沖代地区条里跡周辺図 (S=1/25,000)

1. これまでの調査

旧中津市西部を占める沖代平野には県下最大規模の条里遺構が広がる。この条里遺構は「沖代地区条里跡」として周知され、遅くとも8世紀初頭には施行されたと想定される。条里の限界は、北は日豐線沿いの県道、南は勅使街道（現県道万田四日市線）、東は沖積平野と下毛原台地の境、西は国道212号線の西を南北に走る旧国道と考えられている。現在でも条里東部をはじめとして方形や長地形の地割が容易に観察できる。しかし、近年開発の波に押され条里遺構は急速にその景観を失いつつある。このため、中津市教育委員会では平成7年度より国庫補助を受け緊急の民間開発に伴う調査を実

施してきた。平成7年度市木地区では水田祭祀遺構、平成8年度居屋敷地区では住居跡、平成15年度五唯地区では掘立柱建物跡が検出された。これらの遺構はその時期が6世紀中頃～後半段階で一致することから条里施行以前の集落のセットと考えられる。また五唯地区では12世紀中頃～後半の土壌も検出されている。平成13年度原川地区では時期不明ながら甃や溝、稻株跡とされる小円孔が確認され、平成14年度龍田地区では古代の可能性のある水田跡が確認された。昭和57年度調査では弥生時代の水田から人の足跡も検出されている。既往の調査結果から沖代平野には弥生・古墳時代に水田や集落が存在し、条里制施行後の古代や中世にも集落が存在していたことが判明している。

今年度は、国庫補助を受け久毛地区・莉又地区・牛踏地区の調査を行った。

2. 久毛地区

(1) 調査の経過

調査区は中津市大字宮大に所在する。平成17年10月に民間開発による埋蔵文化財の照会が中津市教育委員会にされ、確認調査を実施した。調査は平成17年11月2日から11月21日までおこなった。

(2) 調査の方法と成果（第3図）

調査区に3本のトレンチを設定し重機により掘削をおこなった。表上より約30cm掘り下げ、黄褐色の地山に達した。人力で遺構検出をおこない、溝状遺構、上坑、ピットなどを検出した。検出した遺構の一部を掘り下げ遺構の形態を記録し、遺物を取り上げた。

(3) 層序（第4図）

1は暗褐色土層、現在の耕作土。2は黄褐色土層、遺構はこの層から検出される。3は黒褐色で粘質土、土師器片、須恵器片を含む。

4は黒褐色土層。黄褐色土が混じる。

(4) 遺構

溝状遺構1

調査区の中央やや東より検出された。幅約1.5m、深さ約20cmである。北東から南西方向に進み、2本に分かれる。一部掘り下げたが、出土遺物は少なく時期は不明。

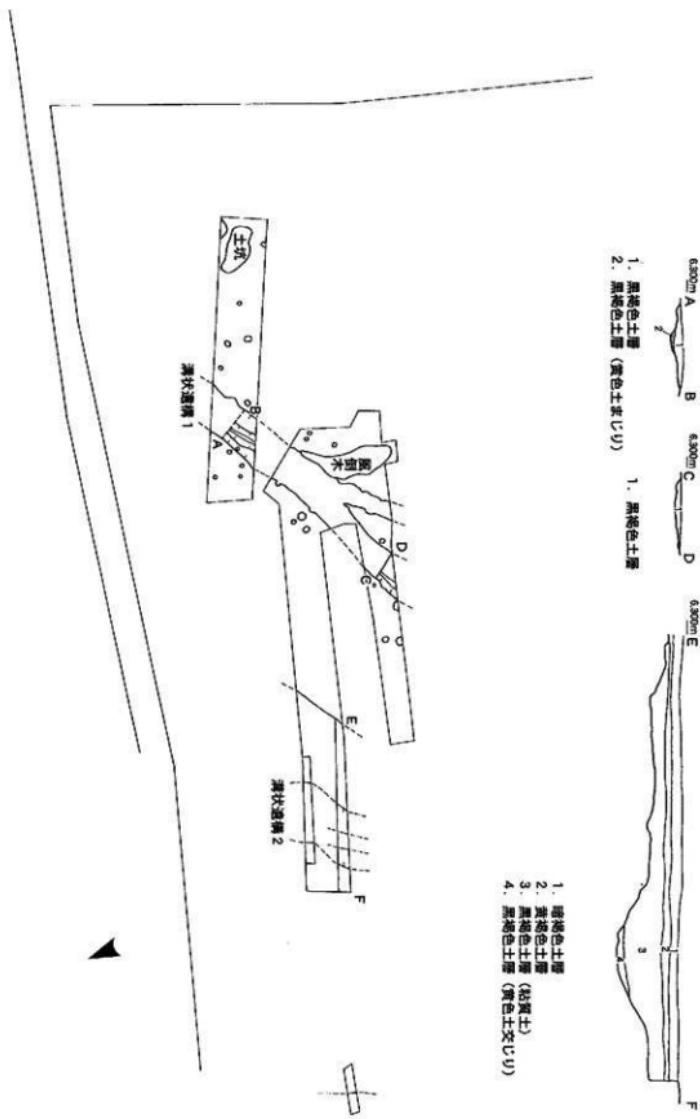
溝状遺構2

調査区の西側で黒褐色土層を掘り下げ検出した。幅約2.2m、深さは約55cmである。遺物は少なく時期は不明であるが、溝状遺構1と平行になるのか。

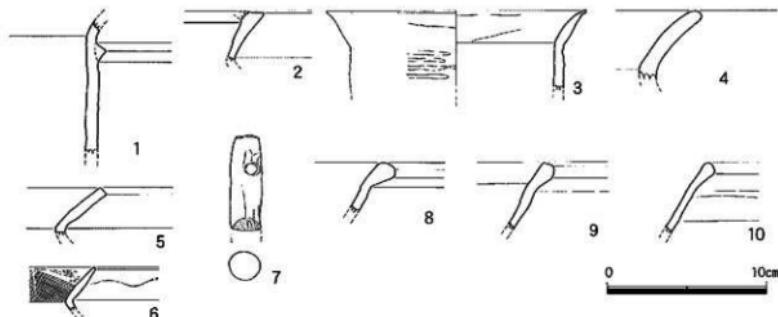
(5) 遺物

1から7は第4図の3層から出土した 第3図 沖代地区条里跡久毛地区位置図 (S-1/2,500)





第4図 沖代地区条里跡久毛地区トレーニング (S=1/200) 土層図 (S=1/40)



第5図 沖代地区条里跡久毛地区出土遺物 (S-1/3)

ものである。1は弥生土器の壺の胴部である。頸部に一条の三角突帯を貼り付ける。城ノ越系で弥生時代中期のものであろう。2は弥生土器の壺の口縁部である。口縁端部は内側に張り出す鋒先状になるものであろう。3から6は土師器の口縁部である。3は外面にタタキを施す。古式土師器⁽¹⁾。復元口径16cm。4の口縁端部は丸みをもつ。在地系のものか。5、6の口縁部は強く折れる。6は口縁部内側にハケ目を施す。搬入品と考えられる。⁽²⁾ 7は棒状土錐である。8から10はトレンチ掘り下げ時に検出されたもので、瓦質土器の鍋の口縁部である。8の口縁部は「く」字に外反し肥厚する。9、10は僅かに外反し、肥厚する。

(6) 小結

今回の調査では弥生時代中期から古墳時代前期の遺物が多くを占め、土坑、溝状造構、ピットなどが検出された。層序の第3層は調査区の西側でのみ確認され、僅かな落ち込みに遺物が検出される。造構ではなく自然地形と判断した。調査区は周辺に比べ、若干高く乾燥している。周辺に集落が展開することが推測される。水田は調査区の東西に展開したものであろうか。開発において盛土が行われ、造構面は保存されることから本調査の実施には至らなかった。

註 (1) (2) 宇佐市教育委員会 文化課 佐藤良二郎氏のご教示。

参考文献

『小部遺跡』 2004 宇佐市教育委員会

『宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1994 宇佐市教育委員会

『沖代地区条里跡(II) 福島遺跡東入塙地区(II)』 1997 中津市教育委員会

3. 茄又地区

(1) 調査の経過（第6図・図版3）

平成17年10月4日、レオバレス21熊本支店より中津市教育委員会文化振興課文化財係へ中津市中央町1丁目741番他地内における共同住宅建設に伴う文化財保護法第93条第1項の届出がなされた。これを受けた文化財係では同年12月19日、確認調査を行いその結果、溝状遺構を1条検出した。この成果を元に工事主体者に対して掘削の範囲等の確認を行ったところ、地下げは遺構面にまで及ばないことが確認された。このため同年12月20日、溝状遺構を一部掘り下げるなど遺跡の性格を把握するための必要最小限の調査を実施し、調査は同日終了した。

(2) 調査の方法と成果

調査は地盤改良のため地下げを行う建物建設域に対して実施することとし、地下げされない駐車場予定地周辺は実施しないこととした。重機を使用し合計4地点の掘り下げを行ったものの、遺跡は発見されず時期不明の陶磁器片などが散見されるという状況であった。

トレンチ（試掘溝）の土層堆積状況を観察したところ、地表面から下約10cmは暗灰色粘質土の現水田層、それより下約5cmは暗灰褐色粘質土の水田床土、その下約20cmは2~3mm大の炭を少量含む灰褐色粘質土、そして黄褐色砂質土の硬い地盤（地山）に至るという層序であった。

溝状遺構は当初調査を予定していなかった駐車場予定地北で発見された。水路敷設のために工事業者が地下げを行った地点を観察した結果確認できた遺構であった。

(3) 層序

第8図は溝状遺構付近の層序である。1は灰色粘質上で現在の水田層。2は灰褐色粘質上で現在の



第6図 茄又地区トレーンチ位置図 (S=1/2,500)



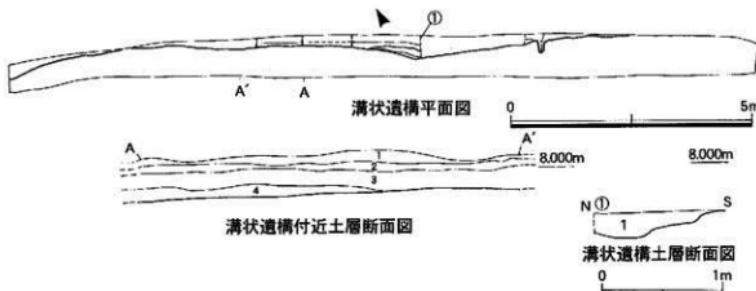
第7図 茄又地区全体図

水田床土。3は黒褐色粘質土。4は茶褐色粘質土の地山である。

(4) 造構 (第8図)

溝 (SD-01)

調査区の北側に位置する。長さ約25m+ α 、最大幅1m+ α 、検出面からの深さ約20cmを測り、断面は二段掘りの形状を呈す。溝は暗茶褐色の粘質土で埋まっていた。溝からは中世をはじめとして近世、近代の遺物が発見された。

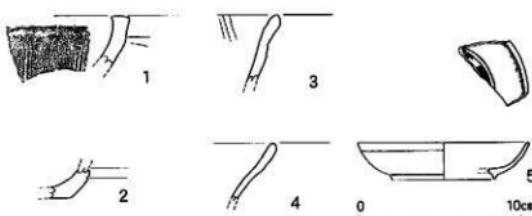


第8図 荏又地区造構平面図 (S=1/200) 土層断面図 (S=1/40)

(5) 遺物

第9図1は調査区、2~5は溝状造構から出土した遺物である。1は瓦質土器の擂鉢。口縁部付近で屈曲しほぼ垂直に立ち上がり端部を平らにする。屈曲部より下の体部にはヘラケズリが施される。色調は内面黒褐色、外面淡黒褐色。胎土に角閃石を中量含む。2

も瓦質土器の擂鉢⁽¹⁾。平らな底部から斜め上方に体部が伸びる。その体部には二箇所で鋭角な凹線が認められ、土器全体にナデ調整を行う。色調は内外面共に灰色。胎土に角閃石を微量に含む。また水磨を受け土器の割れ口は丸くなる。3は瓦質土器の鍋。口縁部はやや外反し、端部は丸く仕上げ、口縁部内面はわずかに窪む。また口縁部付近の内面の調整にはタテ方向ハケメが施される。色調は内面茶色、外面淡茶色。胎土に中量の角閃石を含む。4も瓦質土器の鍋⁽²⁾。体部は外反し口縁部付近で内湾する。全体にナデ調整を施す。色調は内外面共に淡赤褐色。胎土に角閃石を微量に含み白色粒を多量に含む。また2同様土器の割れ口は丸くなる。5は景徳鎮産の小皿。復元口径10.5cm、復元底径6.3cm、器高2.3cmを測る。体部は緩やかに立ち上がる。色調は内外面共に白色。外面と見込みに文様を描く。小野編年の染付皿上群にあたる。また今回図示していないが、調査区から18世紀中葉～末の波佐見産染付皿の破片が出土した。高台に「滿福」の銘、体部に唐草文が認められる。



第9図 荏又地区出土遺物実測図 (S=1/3)

4. 牛踏地区

(1) 調査の経過 (第10図、図版4)

平成18年2月7日、ボーダフォン株式会社より中津市教育委員会文化振興課文化財係へ中津市大字上池永1106番地内における鉄塔建設に伴う文化財保護法第93条第1項の届出がなされた。これを受けた文化財係では同年2月13日確認調査を行い、調査は同日終了した。



第10図 牛踏地区トレンチ位置図 (S-1/2,500)

(2) 調査の方法と成果

コンクリート基礎敷設工事を行う地点に対して調査を実施することとした。重機を使用し合計2地点の掘り下げを行ったものの、遺構は発見されなかった。

(3) 層序

トレンチの層序は地表面から下約14cmは灰褐色粘質土の水田層。その下約15cmは茶褐色粘質土。その下約10cmは灰黄褐色粘質土。その下約20cmは10cm大の石を多量に含むザラザラした灰褐色砂土。その下約11cmはサラサラした白灰色砂土であった。遺構は地表面から2層目の茶褐色粘質土層に存在すると想定されたものの今回の調査では検出されなかった。

・小結

今回又地区では溝状遺構を検出した。明治21年の字図(第7図)によるとこの地点には水路が存在することから、今回の調査ではこの水路跡を検出したものと思われる。したがって、この溝は明治21年までは機能しておりそれ以降に埋められたものと考えられる。溝の掘られた時期については溝から16世紀末の遺物等が出土しているためその辺りの時期が想定できる。

牛踏地区では遺構は検出されなかったものの、地表面から遺構想定層までの深さは僅かであることが確認された。今後付近で開発が行われる際には注意が必要である。

註 (1) (2) 大分県教育委員会文化課文化財班後藤一重氏ご教示。

参考文献・小野正敏「15、16世紀の染付焼 Ⅲの分類とその年代」『貿易陶磁研究第2号』日本貿易陶磁研究会1982

・大橋康二、西田宏子「古伊万里」『別冊太陽 日本のこころ63』平凡社1988

第3章 中津城本丸南西石垣（V）

1. 中津城の歴史と遺構

豊臣秀吉は1587年、九州平定のため、子爵の武将達を九州に入国させた。翌1588年彼らによって九州各地に初めて近世城郭が構築される。そのうちの一つである中津城は黒田孝高によって築城された。黒田孝高は豊前六郡の領主として下毛郡に入国し、はじめは大塚山の砦を修築して根拠地としていたが、天正16年中津江太郎の居城であった丸山城を修補し、入城した。黒田氏は1600年筑前へ転封となり、細川忠興が入国する。忠興は翌年居城を小倉城に移し、中津には忠利を入れた。忠利は1603年から1620年まで中津城の増改築を行った。中津城三の丸西門の石垣には「慶長12（1607）年9月」という文字が刻まれていたという。1620年、本丸・二の丸・三の丸・8つの門と22の櫓が完成し、現在の中津城の形ができあがったとされている。1632年細川氏が熊本に転封後、小笠原氏が入国する。小笠原氏は中津城下の整備を行い、1652年ほぼ完成したと言われる。その後1717年奥平氏が入国し、1871年まで藩主を勤め、その年、城は取り壊された。

中津市では、平成13年度から本丸と三の丸の間の石垣を整備し、最終的に堀を掘りあげ水を流し江戸時代の姿に近づける計画である。中津城は、現存する九州最古の近世城郭であり、当時の石垣が地表面に露出している九州唯一の石垣である。しかし、黒田時代の資料に乏しく、築城当初の城の様子は全くといっていいほどわかつていない。当時の様子を描いたと言われる絵図も作成されたのは17世紀中ごろと推定されており、石垣が黒い直線で描かれるのみで、建物の配置は不明である。当時の中津城の様子を知る手段は唯一発掘調査だけという状態である。

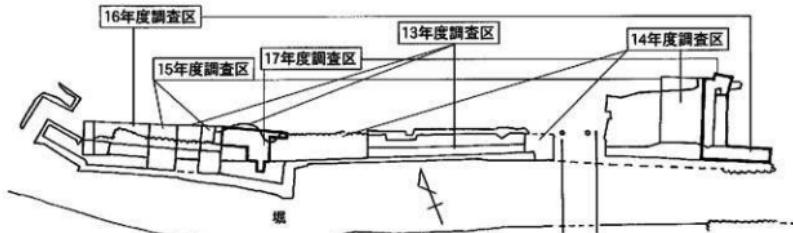
2. これまでの調査と工事の概要

中津城の調査は、平成13年度、中津市都市計画課が国土交通省の「まちづくり総合支援事業」の一環として、中津城本丸と三の丸の間の堀と石垣の工事に着手したのがきっかけである。工事着手前、中津城の石垣が九州最古の様子を色濃く残していることが判明し、当時の技法で石垣解体復元を行わざるを得なくなった。工事は都市計画課の予算で行い、解体の際に行う石垣の調査を中津市の単費で行うこととなった。さらに、石垣の内部構造や城内の様子を知る最大唯一の機会であることから、確認調査を国庫補助事業で行うこととした。

これまで石垣工事は堀に面したE面、F面、G面を終了。H面は道路に近い西側から解体を行い、地表面近くまで積み上げた。工事に伴い確認調査を実施したところ、石垣内部から城内を向いた裏側の石垣が出土した。これにより、築城当初の石垣が今より低く、幅の狭いものであったことが判明した。時代を経るにつれ、石垣は堀側ではなく、城内側へ次々と拡幅工事が行われていた。

また、16年度、E面の石垣内より總柱の礎石建物跡を検出した。建物は石垣の上ではなく、石垣内に一体となって建設されているものであった。建物の年代は築城当初まで遡るもので、黒田時代の石垣の形状を知る貴重な資料を得ることができた。

石垣の中だけでなく、本丸内にもトレーナーをいた。椎ノ木門近くの第8トレーナーからは、13年度に大型の礎石が確認された。その後周囲を拡張し調査をしたところ、礎石を囲む石列を検出した。またその横からは中世居館の一部と思われる方形の区画溝を検出した。黒田氏が入部する以前の中津城の遺構が初めて一つ明らかになった。



第11図 石垣工事範囲・調査範囲 (S=1/1,250)

2001～2005
調査地点
 過去
調査地点
 堤推定地

第12図 中津城本丸付近地形図 (S=1/5,000)



3. 17年度調査の概要

(1) E面城内側（20区）

G面の裏側では平成14年度、旧石垣と、石垣に登る階段を検出した。また平成16年度、E面の裏側で、旧石垣と建物跡を検出した。これらより、旧石垣の幅や形状が判明したが、問題は出角の裏側がどうなっているかである。出角のラインにそって、裏側も曲がるのか、櫓が建つスペースがあるのか。この場所の形状で今後の復元の計画が決まる。

現状ではこの場所は日本庭園風に形づくりされていた。大きく外へ膨らみ、右がたてて並べられていた。民間の別荘がこの地にあったというので、その庭園跡と思われる。外に膨らんだ部分は近代の遺物が出土するため、重機にて造構面がでてくるまでカットした。

その結果、これまでの調査で確認した石列13につながる石列30をはじめ、いくつもの石列を検出し、出角の裏側の形状が徐々に解明されてきた。



石列15

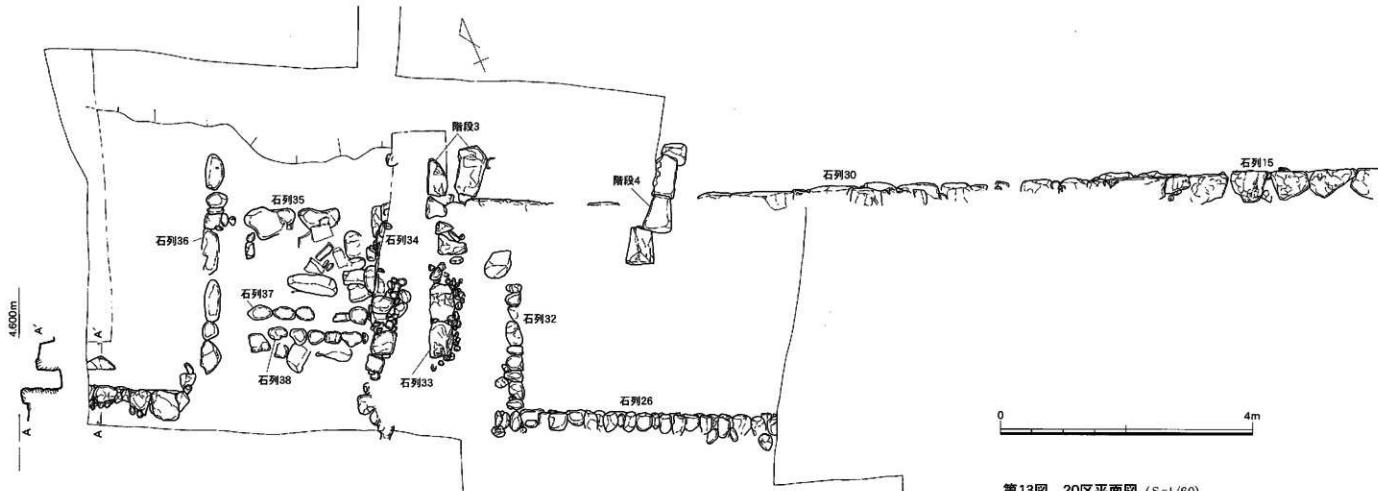
石垣への登り口



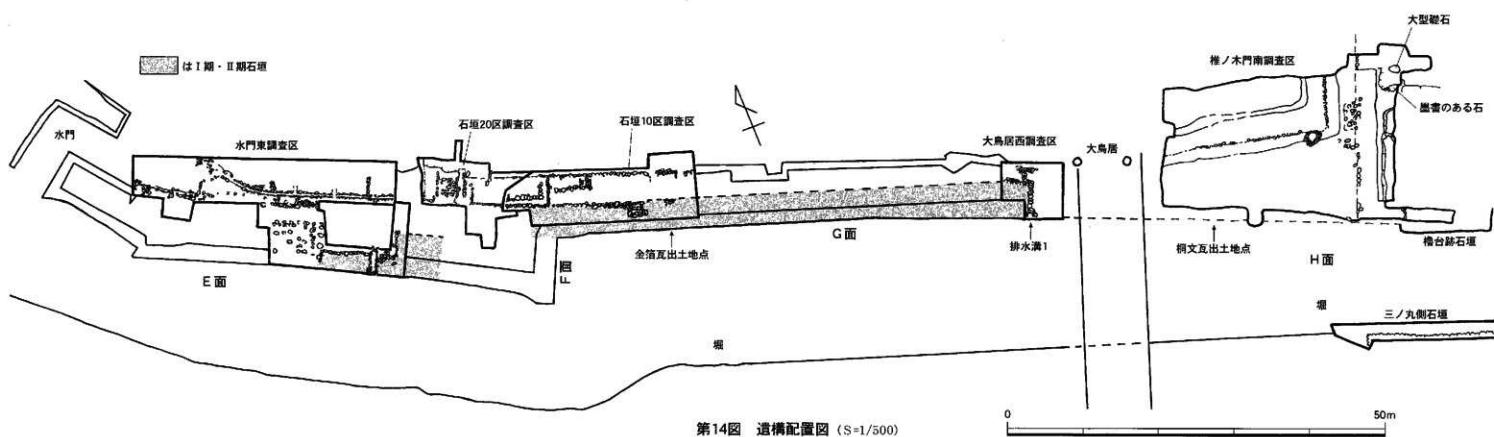
20区 石列36

20区調査の最大の目的は、過去検出された黒田時代の石垣が、出角の裏でどのような形になるのかを解明することであった。しかし、現段階ではトレンチ掘りでは旧石垣は確認できおらず、来年度の課題としている。今回の調査では、第Ⅲ段階である細川時代の造構から確認することができた。まず、本丸側の石垣であるが、石列30は以前検出した石列13に連続するものである。石列13は高さ1.75mで黒田時代の石垣を埋めて細川時代に拡幅した本丸側石垣である。石列15の位置がちょうど石垣にあがる入り口と見られ、石列15はレベルがそろう横一列の石列である。そこから入り、左右の合坂の階段を利用し石垣の上に登るのである。そこから20区の石列30につながる。石列30は途中破壊を受け、一段のみの石列35へと続き、90度屈曲して石列35へと続く。

36になる。石列36も一段残るのみであるが、調査区西端に顔をだしている溝状石列の手前で終息している。溝状石列は平成13年度、14年度に細川時代の溝として確認されているもので、石列36と交わる場所で途切れている。これより東側にいかないことは明確であるが、北側に屈曲するかどうかは、今年度の調査では未確認である。第15図の1がこの段階の造構となる。ただし、石列36はこの位置で作りなおされている。次の段階では石列30が35より手前で90度折れ石列34へと続く。この段階で



第13図 20区平面図 (S=1/60)



第14図 造構配置図 (S=1/500)



第15図 20区 遺構変遷図 (S=1/150)



20区 西から東を望む

は、石列35や36は地面に埋まり、石列37、38がつくる溝が石列34に取り付く。石列33はやや高い位置にあり、その性格は不明。石列32は昨年度検出した石列26と一緒に造構で、幕末に存在した建物遺構を取り囲む溝を形成している。石列26と32で取り囲むエリアもいまだ未掘のため、今年度は全容の解明は望めない。しかし、ここは全面が赤い焼土で覆われ、また石列30を切る形で階段3と階段4がある。階段4は木丸側から石垣上へむけて一直線に斜めに連続する。階段の袖の部分であろう。階段3は東側が低く、西側が高い。これ

自体が階段の踏み段になっているようである。ただし、いずれも石垣の外からとりついており、近世城郭のそれとは考えにくい。また出土遺物より、明治以降のものと考えられる。

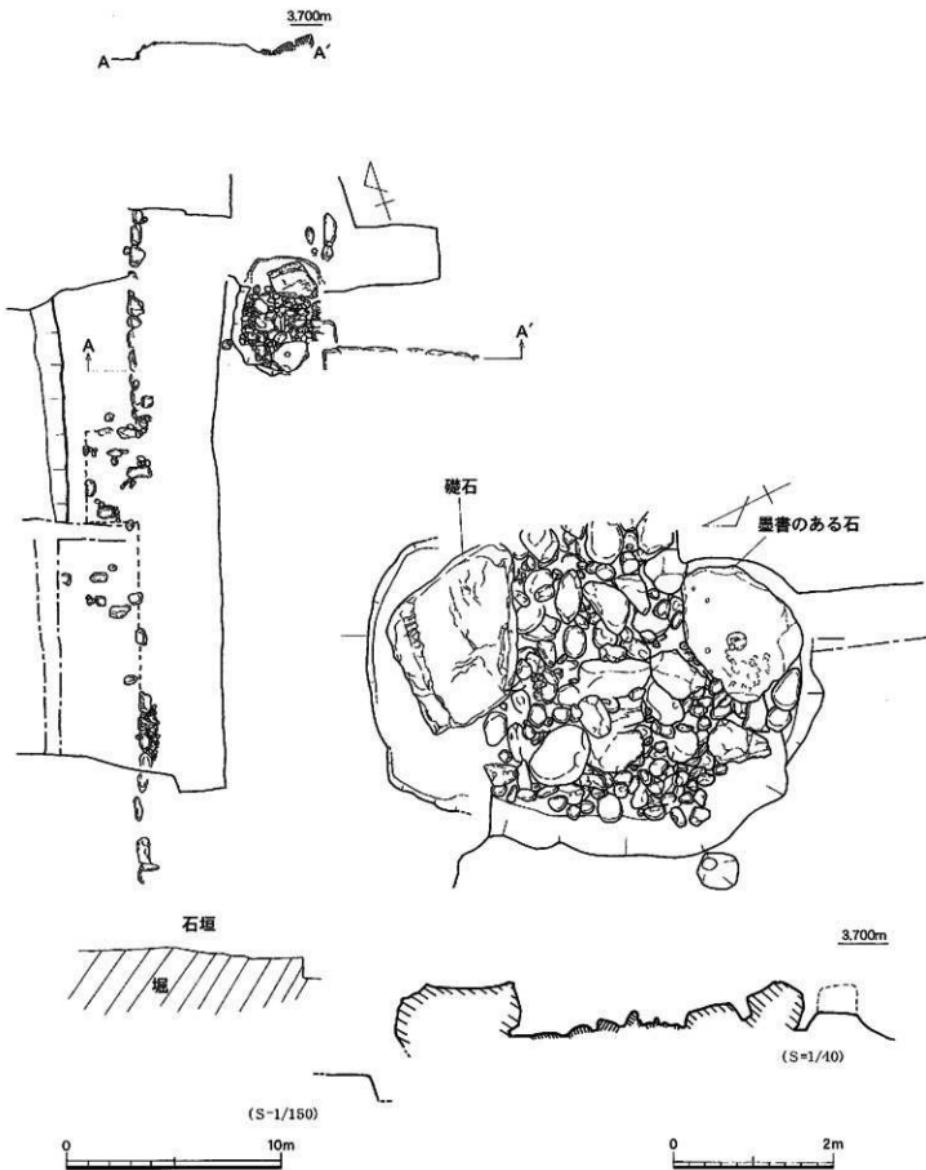
20区出土の遺物としては、第18回の5～9がある。中でも5～7は一括資料で、石列34の前面（西側）にほぼ完形の平瓦、丸瓦とともに出土した。まとまって落下したような状態であり、この遺物が埋められて後、石列34が造られている。5はL-10A類である。6は小花文の9-A1類で、これまでの調査で、細川期の一括廃棄土坑から出土している。小倉城では17世紀前半（1630～1640）年代の井戸の裏込めから出土している。また同様のものが門司城からも出土しているため、1615年以前におかれるようである。7は今回初めて検出した瓦当文様である。中心飾りは雄しげの文様で、同じタイプのものが小倉城からも出土しており1590年代頃に比定されるという。これらの瓦は石列35とともに埋められている。黒田時代の石垣はこれより幅が狭かったことがこれまでの調査でわかつており、石列35の幅になるのは細川期以降である。ゆえに、5～7の瓦は細川時代の建物に使用されていた一括資料であると判断した。

また、20区からは、8と9の平瓦当も出土した。8は3-A1類で、宇佐の高森城と同范。9は3-A2類で、8の退化形態である。名護屋城と同范。いずれも5～7が出土したよりも高い位置からの出土であったが、遺構にともなっておらず、古い遺物の混ざりこみと思われる。

これまで同様、今回の調査も、遺跡確認を目的としており、なるべく出土遺構は破壊せずに埋め土保存することとしているので、完掘ができない。そのため、完全に全容を現すことは難しいが、来年度以降も引き続き確認調査を継続し、遺跡整備の資料とする所存である。

(2) 本丸8トレ

これまでの調査で、大型礎石を作う建築物があると推定されている場所である。しかし、建物中心部は椎ノ木門の檜台があることから、その下を掘ることはできない。檜台の上には小幡英之介の銅像があり、そこにあがる階段を取り替えるため、大型礎石の南側を若干拡幅することができた。当初、



第16図 椎ノ木門南調査区平面図・断面図

別の礎石が出土し建物のプランが解明できることを期待したが、礎石の検出にはいたらなかった。

しかし、大型礎石の南側から118cm×91cm、厚さ42cmの表面平らな石が出土した。石材は黒い凝灰岩で、中央に径12cmの丸い穴があいている。穴の深さは約17cm。丸く掘り込まれた穴に斜めに落ちていた。表面及び穴の中は幅3~4cmのノミの加工痕が全面に残る。ノミで削りっぱなしの状態である。穴の周りには、墨書文字が確認できた。ノミで加工した後に書かれている。石の裏には矢穴があった。矢穴は一辺のみである。石の断面を見ると、表面が最も面積が大きく、四側面は削られ丁寧に加工されている。裏面は矢穴の場所で削られたままになっている。ゆえに、この石の使用時は建てるのではなく、平らな表面を上にむけて水平にする使用法をとっていたようだ。

この石の最大の特徴は表面に書かれた墨書である。黒い石に黒い墨で書かれているため判読しにくいか、現段階で28文字ほどが確認できている。文字の配置は中央の丸い穴を挟んで両サイドに大きな文字、上下に小さな文字を配す。穴の右に縦方向に梵字が四文字ある。一番上が「ウン」三番目が「キリーク」。穴の上に「教」、穴の下に「大」、穴の左に「八」「二」「歳」「初」、「十一月」「サ」「八」。

①墨書の意味

大分県立歴史博物館の渡辺文雄氏に解説をお願いし、上記の文字を読むことができた。読める文字は少ないが、左の数字は年号と思われ、一番上の元号がくるであろう場所が削られており判読不能なのが悔やまれる。「初」の右の「キ」は「歳」の略字と思われる。渡辺氏は、4文字の梵字は金剛界の四仏をあらわしているのではないかと推察している。一番上の「ウン」は阿閦如来（あしゅくによらい）で東を現し、三番目の「キリーク」は阿弥陀如来（あみだによらい）で西を現す。二番目と四番目に「タラーク」宝生如来（ほっしょうによらい）=南と、「アク」不空成就如来（ふくうじょうじゅによらい）=北が書かれていた可能性がある。石塔の塔身の四方に、この四仏を書くことがあるという。書体の特徴から中世的要素が強く、近世のものではないとのことであった。

②石の用途

検出時は、礎石と信じていたのであるが、城内の他の礎石は全て石垣と同じ花崗岩を使用している。



大型礎石と墨書のある石



墨書のある石

しかし、この石は柔らかい凝灰岩で、異質であった。表面を覆う鑿の加工痕は、削ったままで粗く、文字を書いて記念碑のように置いておくためのものとは考えにくい。穴は貫通していらず、柱を立てるには細かすぎる。柱のほぞ穴としても、石に柱が座った痕跡がなく、扉のようなものを回転させた時につく摩擦の痕跡もない。以上から、礎石のように直接何かを置いたものではなく、地中に埋めるタイプが考えられる。中心に仏舎利を模した水晶等の鎮壇具を入れる舍利孔を開けた石を、寺院の塔の心柱の下に埋納する例がある。この石もそのような鎮壇具を納め、地鎮に用いられた類と思われる。

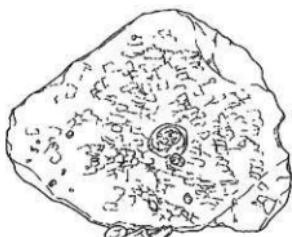
③他の資料

以前から発見されていた礎石の上には寺院の床面に敷き詰められたと思われる壙が多量に出土した。礎石や今回の石は、一段高くかさ上げされた区画の中に位置する。

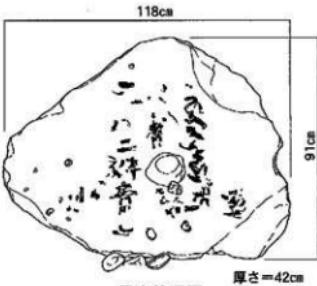
また、近くの壙の底からは、「作り出し」のある礎石が出土した。礎石に円柱の「作り出し」を設けるのは位の高い寺院建築のみで、城郭には用いない。以上から、この地点に仏教寺院が建立していたと考えるのが自然である。

④年代

大型礎石の座っている層は、黒田時代の層であることがこれまでの調査で判明している。大型礎石上からは、大量の壙と共に、名護屋城と同範の丸瓦（第18図1）が出土した。左三つ巴、珠文が16個で昨年度概報で分類したL-16A類である。また今回の墨書のある石の下からも名護屋城と同範の丸瓦、平瓦が出土している。第18図3の中心飾りは五葉文で、4-B1類である。これは過去中津城で多く出土しているタイプで、名護屋城と同範である。また今回図示しえなかつたが、同じく名護屋城と同範の三葉文軒平瓦4-A1a類が出土した。これら遺物の関係を考えると、墨書のある石は少なくとも黒田時代に存在しており、同時代の瓦、つまり建物とともに廃棄されていることは確かである。この石に彫られた矢穴は幅10cm、深さ7cmと大きく、そ



ノミ加工痕図



墨書状況図



墨書解読図

第17図 墨書のある石平面図・解説図 (S=1/20)

の形状から中津城で確認された矢穴の中では最も古い時代のものである。関西では室町時代から石造品に矢穴が確認されているが、九州では矢穴があるのは近世城郭の石垣だけである。また、渡辺氏によれば、梵字の書体は近世までは下らず、中世的要素が強いといふ。

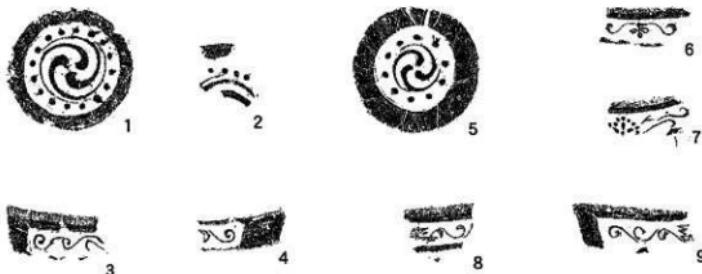
絵図からいふと、黒田時代の絵図は建物が描かれる詳しいものではなく、当時の様子はわからない。詳しい様子がわかる絵図で最も古いものは、寛文3年（1663年）に描かれた絵図であるが、そこにはこの位置に建物は描かれていず、それ以降の絵図にもない。細川氏が中津に入ったのが1600年、以後1620年までの間に中津城は大改修され、現在の姿がほぼ整った。石垣は大きくなり、門や櫓なども整備された。細川忠興の息子忠利は二の丸に長福寺を建立し、一角にマリア堂を建て、母親であるガラシャ夫人の御靈をなぐさめるミサを行ったといふ。この長福寺は本丸入り口の椎ノ木門のすぐそばで、今回寺院があったと思われる場所から非常に近い位置であることから、両寺院が同時期に存在したとは考えにくい。

以上を考えると、この寺は黒田時代に存在した建物で、細川時代、長福寺を建立するまでに破壊されたと考えるのが妥当である。

⑤考古学的位置づけ

これまでの中津城の調査で文字資料の出土は初めてのことである。通常、城郭から出土する文字資料は、石垣に石工の名前や日付を書いてある程度であるが、今回のように、大きく石の全面に多くの文字が書かれた例は九州はもちろん全国でも類例がない。

配置の問題であるが、近世城郭において、本丸内に寺院をおく例はなく、現在知る限りにおいては、安土城の本丸内に寺院が建立されているのみである。全国的にも桃山時代の城郭がどのようなものであったか、まだ不明な点が多く、研究途中である。中津城においても、黒田時代の具体的な城の形は解明されておらず、今回城内の建築物として初めて確認できた。まだ近世城郭の定型にしばられていない、中世的な要素を残す九州最古の近世城郭中津城の初期の様相の一端をうかがうことができた。



第18図 丸瓦当 平瓦当影 (S=1/6)

(3) おかこい山

中津城は西を川、北を海といった自然の要塞で囲まれているが、北～東～南は、中津城下町の外周は総堀の通称「おかこい山」で囲まれている。おかこい山は上を盛り上げた土壁で、外周だけではなく、三ノ丁の南側に東西に走る中堀沿いにも築かれていた。その大半は失われてしまったが、現在のところ、4箇所残っているのが確認できた。

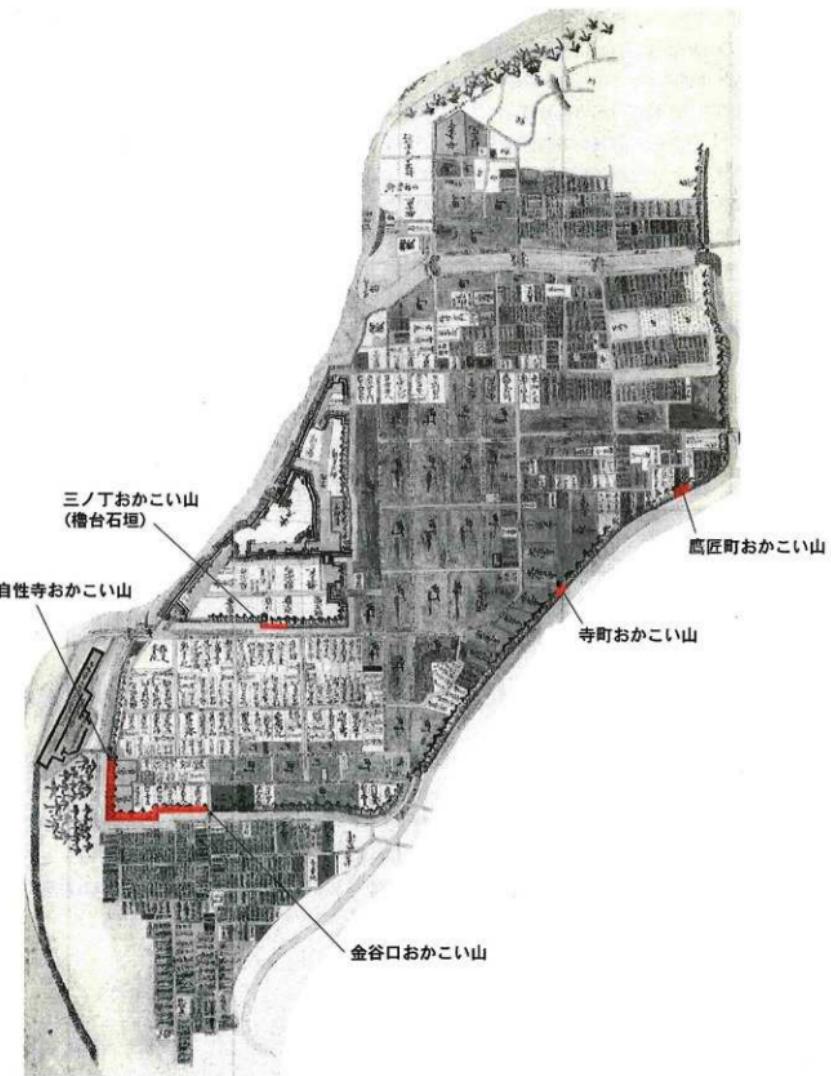
4箇所とは、自性寺から金谷口にかけて、三ノ丁の民有地、寺町の寺域内、鷹匠町の民有地である。このうち、最も残りの良いのが自性寺のおかこい山である。現地は城下町の東南のコーナー部にあたり、南北150m、東西230mの長さに渡って残っている。ここは寺の墓地を囲んでおり、山に葺かれた石が落ち墓石を痛める恐れがある。今後の保存整備の検討資料とするため、範囲をおさえるためにまず簡単な測量図を作成することとした。その結果、残りのよい部分のおかこい山の幅は上が4.8m、下が16m、高さは内側が4.1m、外側が5.3mと、巨大なものであった。これは、この位置が最も川に近い場所で、時折土手が決壊して洪水が起きていたのでその防止の意味もあったようである。東西方向の部分は、現在その上を線路が走っている。西のコーナー部から東の金谷口までの間は、途中やや内側へ屈曲し、230m先の金谷口まで伸びる。金谷口にくくと、おかこい山の断面が道沿いにそびえている。第20図でもわかるように、このあたりは字図もおかこい山の形に分筆されている。

一方、三ノ丁の民有地にあるおかこい山は、高さも低く、幅も狭い。今回は測量まで到達していないため、正確な数値は不明である。堀の名残の水路沿いにあり、竹林になっており、かなり掘削されてしまっているが、往時を十分偲ぶことができる。ここで注目すべきなのは、一部に右垣が残っていることである。幕末の絵図を見てみると、土手のおかこい山の中に、一箇所右垣を持つ櫓が描かれている。位置的にも問題ない上、下の方は初期の段階の技法を持つ石垣が積まれている。民有地の中まで入らないと見えないため、これまで人に知られていないものであった。

寺町や鷹匠町に残るおかこい山はそれそれがわずかに残存するのみであるが、往時の面影を十分に伝えてくれる。これまで自性寺のみしか知られていなかったおかこい山が意外に点々と残存していたことは嬉しい限りである。

おかこい山の歴史は古く、細川氏の時代に工事を始め、17世紀中ごろの小笠原の時代には完成していたといわれている。細川氏が中津に入ったのは1600年。まだ世の中は繁張の時代であり、いざという時には城下町全体を守ろうとした当時の緊張感が伝わってくる。現在総堀が残っている城下町は九州では中津のみであり、中津城のおかこい山はその大きさといい、希少性といい、申し分ない。

これまで、お城というと、天守閣をはじめとする建物に関心が集まる傾向があるが、中津城は九州最古にして唯一残存する石垣を有すだけでなく、同じく九州で唯一総堀を残す初期の城として、貴重な存在である。今後は城内の調査と平行して、おかこい山の正確な測量、成立時期の確認調査にも取り組み、城下町全体で調査に取り組んで行きたいと考えている。



第19図　おかこい山現状況

現存するおかこい山



自性寺おかこい山 1



自性寺おかこい山 2



自性寺おかこい山 3



金谷口おかこい山



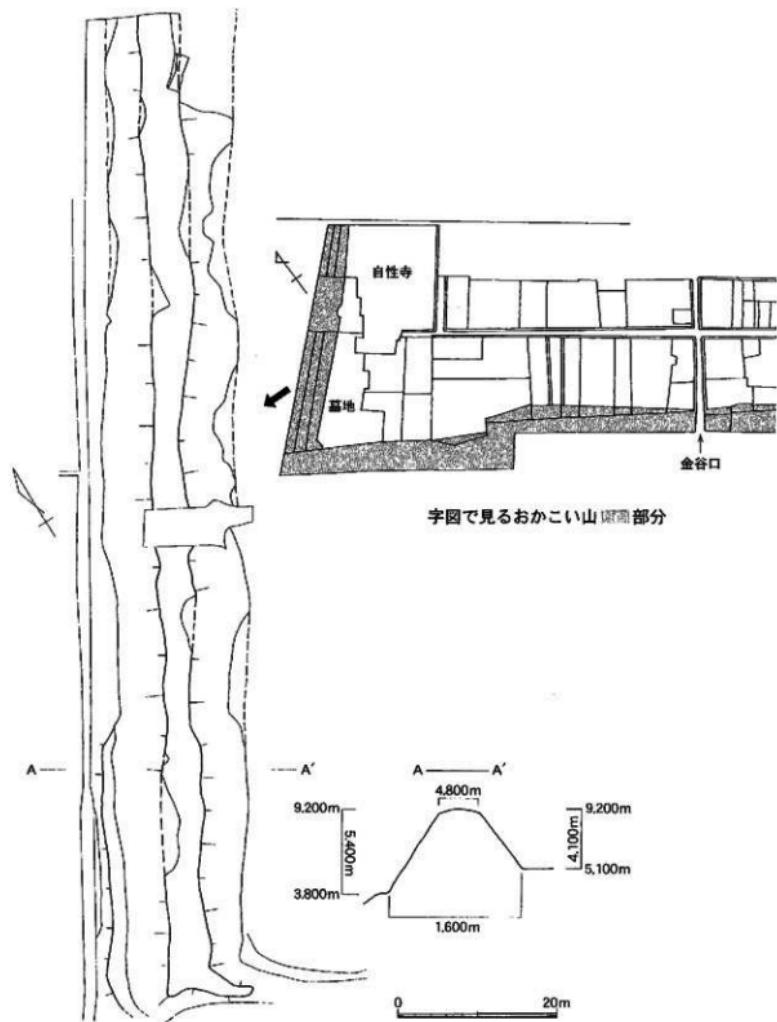
三ノ丁おかこい山 1



三ノ丁おかこい山 2 (橋台石垣)



鷹匠町おかこい山



第20図 自性寺おかこい山平面図・断面図 (S=1/600)

図版 1 沖代地区条里跡久毛地区



トレンチ状況 東より

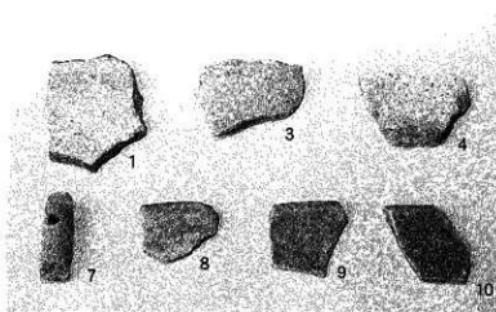


溝状遺構 1

図版2 沖代地区条里跡久毛地区



溝状遺構2 挖り下げ

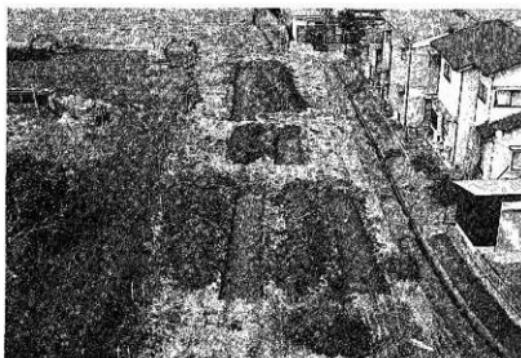


沖代地区条里跡久毛地区出土遺物

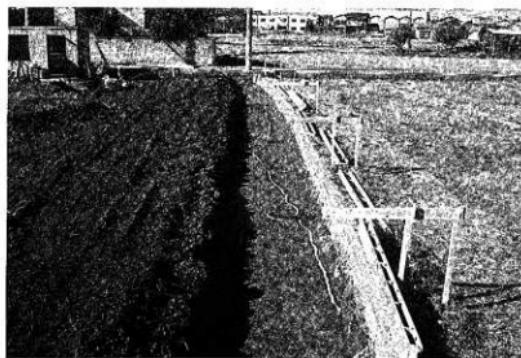
図版3 沖代地区条里跡苟又地区



調査前風景
北から

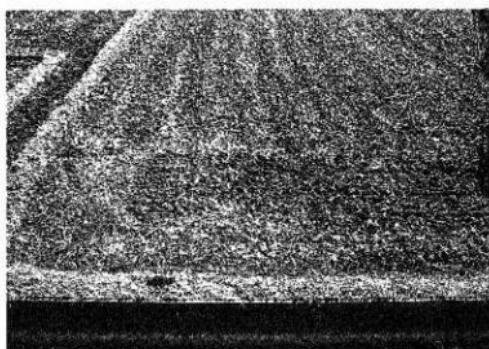


トレンチ配置状況
南から

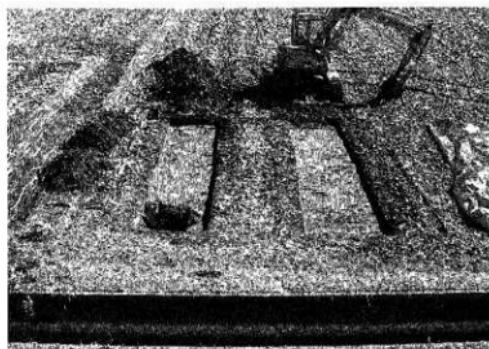


溝状遺構検出状況
東から

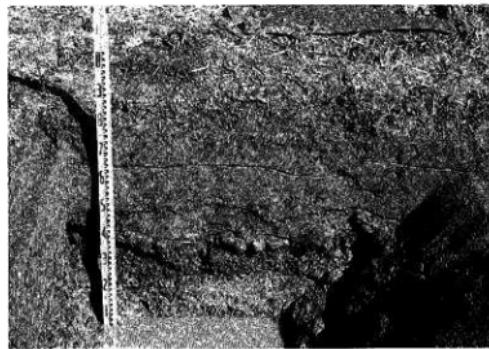
図版4 沖代地区条里跡牛踏地区



調査前風景
西から



トレンチ配置状況
西から



土層堆積状況
南から

報告書抄録

書名	おき たい ち く じょう り あと く げ ち く かわ ま た ち く うし ふみ ち く 沖代地区条里跡 久毛地区・刈又地区・牛踏地区 なか つ じょうほん まる なん せい いし がき 中津城本丸南西石垣 (V)							
副書名	2005年度中津地区遺跡群発掘調査概報							
卷次	18							
シリーズ名	中津市文化財調査報告							
シリーズ番号	第41集							
編集者名	高崎 章子 花崎 徹 浦井 直幸							
編集機関	中津市教育委員会							
所在地	〒871-8501 大分県中津市豊田町14-3 TEL 0979-22-1111							
発行年月日	2006年3月31日							
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
沖代地区条里跡 久毛地区	大分県中津市 大字宮夫 271他	44203	101007	33°	131°	20051102 ~ 20051121	80m ²	アパート 建設
				35°	12'			
				00"	31"			
沖代地区条里跡 刈又地区	大分県中津市 中央町1丁目 741他	44203	101007	33°	131°	20051219 ~ 20051220	170m ²	アパート 建設
				35°	11'			
				10"	30"			
沖代地区条里跡 牛踏地区	大分県中津市 大字上池永 1106番地	44203	101007	33°	131°	20060213	24m ²	鉄塔建設
				34°	12'			
				42"	33"			
中津城 本丸南西石垣	大分県中津市 1278-1	44203	101001	33°	131°	20050601 ~ 20060331	2,170m ²	保存整備
				36°	11'			
				10"	16"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
沖代地区条里跡 久毛地区	集落	弥生 古墳	溝	弥生土器 土師器				
沖代地区条里跡 刈又地区	集落	中世 近世・近代	溝	瓦質土器 陶磁器				
沖代地区条里跡 牛踏地区	なし	なし	なし	なし				
中津城 本丸南西石垣	近世城郭	中世 江戸時代	石列、礎石	瓦、陶磁器、土器 墨書きのある石	本丸内に寺院跡検出			

沖代地区条里跡 久毛地区・苅又地区・牛踏地区
中津城本丸南西石垣（V）

中津市文化財調査報告 第41集

2006年3月31日

発行 中津市教育委員会
印刷 緑川原田印刷社